リマ・バレット「カリフォルニア異聞」[1]（翻訳）

岐部雅之

解題

ブラジル人作家リマ・バレット（Lima Barreto; 1881–1922）は、黒人奴隷の血を引く混血の両親のもとにリオデジャネイロ市郊外に生まれた。幼少期に奴隷制廃止（一八八八年）を経験しているが、辛酸を極めた人種差別や経済格差の経験はリマ・バレット文学の源泉となっており、現在でも重要な作家の一人として位置づけられている[2]。彼の作品の大きな特徴は、二十世紀へと移り変わる時代に顕著であった芸術的・高踏的な言語表現とは一線を画して、庶民の言葉を取り入れながら文学を身近なものにしようと試みた点である。文学批評家アルフレッド・ボージ（Alfredo Bosi; 1936–2021）が、リマ・バレット文学の一貫した社会批判精神は一九三〇年代の小説群に受け継がれたと述べているように、その高い文学的価値はテーマにおいても言語表現においても先見性が見て取れる（Bosi 2000: 324）。

しかしながら、リマ・バレット自身はブラジル文学史の時代区分では前近代主義時代に位置づけられ、やや地味な存在に留まっている。それは近代主義時代の幕開けを告げる「近代芸術週間」[3]の華々しさとは対照的で、同年十一月に没したリマ・バレットの文学的評価に少なからぬ影を落としているようにも映る。さらに、三度にわたって立候補したブラジル文学アカデミーの会員にもなれなかった。それでも同国の文学を代表する作家であることに変わりなく、二〇一七年にはパラチ国際文学祭（Festa Literária Internacional de Paraty）で名誉作家に選ばれ、リマ・バレット文学を再評価すべく参加者らが議論を交わした。没後百年を迎える二〇二二年には大々的な回顧展などが期待される。

今回翻訳した短編「カリフォルニア異聞（A nova Califórnia）」は一九一一年に雑誌『アメリカーナ誌（*Revista Americana*）』で発表され、一九一五年の長編『ポリカルポ・クアレズマの哀しき最期（*Triste fim de Policarpo Quaresma*）』の初版本に収録されたものである。その後、リマ・バレットのアンソロジーには欠かせない代表的な短編となり、英語のほか、ドイツ語、ギリシャ語、スウェーデン語にも翻訳されている[4]。

なお、原著タイトルに「nova（新たな）」とあるとおり、本作品

は十九世紀半ばに米国のカリフォルニアで起こったゴールドラッシュに着想を得ている。リオデジャネイロ州奥地の架空の町トゥビアカンガを舞台に、人間の骨から金を作る錬金術の噂が広まり、埋葬されている骨の争奪戦で醜い殺し合いが発生する。そんな騒動の中で生き残るのが、冒涜行為に異を唱えながらも酒ばかり飲んで何も行動しない懐疑論者の元学生であった。このように鮮やかに視点を転換し、人間の持つ狂気を冷徹に描写する手法はリマ・バレット文学の魅力のひとつである。（解題おわり）

カリフォルニア異聞

一

その男がどこから来たのか、誰ひとり知る者はいなかった。郵便局長が受け付ける郵便の差出人にライムンド・フラメルという名前があったので、それだけは分かっていた。配達員は毎日のように町外れにあるそのよく知らない男の住所まで、大量の郵便物を抱えていった。世界各地からの手紙の束、意味不明の外国語で書かれた分厚い雑誌、書籍、小包など。

石工のファブリシオがその新たな住人の家で仕事を終えて戻ってくると、酒場の連中は一体どんな仕事を頼まれたのかと問いかけた。「食堂にかまどを造ることになっちまったよ」黒人は答えた。

そんな風変わりな工事が明るみになり、小さなトゥビアカンガの町に走った驚きはいかほどだったか。食堂にかまどとは！　それから、ファブリシオは丸底フラスコ、刃のないナイフ、調剤室にあるようなグラスがあったと語った。「テーブルや棚に奇妙なものが置かれていたんだ。まるで化け物の家の台所道具だったよ」

町は混乱した。進歩的な人たちは贋金の作り手だと考え、信心深い人や素朴な人たちは化け物の片棒担ぎをやっていると思うのだった。

荷馬車引きのシッコ・ダ・ティラーナは、車輪を軋ませながら謎に包まれた男の家の前を通りかかる際、食堂の煙突から立ち上る煙に目をやり、十字を切って「恐ろしや」と呟かずにはいられなかった。「薬屋が止めなかったら、警察副署長があの怪しいやつの家を包囲しに行ったかもしれない。みんな不安がっていたんだから」

ファブリシオから得た情報を踏まえて薬屋のバストスが出した結論は、この未知なる人物は学者、それも偉大な化学者で、自身の学術研究を平穏に進めるべく身を潜めているというものだった。

学歴のあるバストスは町でも尊敬を集める市会議員で医者でもあったから、彼が言うことはすべての人の心を安堵させた。薬の処方も好まず平和に生きることを望んでいたジェロニモ医師も、この薬屋と手を組んだ。こうして、人々はこの町にやって来た偉大な化学者に静かな敬意を抱くようになった。

午後になると、その男は姿を現した。トゥビアカンガの川岸を散策し、あちらこちらに腰を下ろして澄んだ川の水をぼんやり眺め、黄昏時の寂寥とした中で物思いに耽る。そんな折、住民たちはみな帽子を脱いで「こんばんは」という挨拶に「先生」と付け足すこと

も珍しくなかった。そしてまた、子どもたちに対する男の深い思いやりに町の人々は強く心を打たれていた。男が子どもたちを見つめる姿は、不幸と死のために生まれてきたことを憐れんでいるかのようであった。

実際、午後の穏やかなひと時、救世主のような慈愛を見せる様子が見られた。道徳上の抑圧に浸りながらも艶やかな肌をした躾のなっていない黒人の子どもばかりではなく、熱帯特有のカヘキシーの中で守られて過ごす艶のないひび割れた肌の白人の子どもをも慈しむ。

男がときおり考えたくなるのは、ベルナルダン・ド・サン＝ピエール[5]がポールとヴィルジニーに心を込めて描いた一方で、二人の周囲にいる奴隷たちを顧みない理由であった。

この学者に対する敬愛はあっという間に町全体に広がったが、全員というわけではなかった。というのも、ただ一人その新たな住人の功績をあまり評価しない者がいたからである。

ペリーノ大尉[6]は教師である上に、与党寄りの地元紙『トゥビアカンガ新聞』の編集主幹でもある。この人物が学者を快く思っていなかった。曰く「諸君はあいつが何者なのかいずれ分かるはずだ。詐欺師か、ごろつきか、あるいはリオから逃げてきた盗人だろう」

そうした彼の意見は何の根拠もなく、町の知識人として享受してきた名声を脅かす敵の出現が内心面白くなかったのだ。ペリーノは化学者ではなかったものの、学識豊かな文法学者であった。トゥビアカンガでは文章を書こうものならペリーノ大尉から必ず罵声を浴びせられた。リオで注目を浴びる作家に対しても、「たしかに才能はあるかもしれないが、『ある別の』だの『その上さらに』だのと書いておるではないか」[7]と言い、苦虫を噛み潰したように口を歪めた。

トゥビアカンガの村人はみな、もったいぶったペリーノ氏を尊敬してきた。国の著名な作家にさえ異を唱え、修正するひとかどの知識人なのだから。

日が暮れると、ソテーロ、カンディド・デ・フィゲイレード、またはカストロ・ロペス[8]に少し目を通し、髪を染め直してから、この老教師はおもむろに家を出る。ミナス製コットンの上着のボタンをしっかり留め、たわいない話をするためにバストスの薬屋へ向かう。話をするというのも一つの言葉の綾に過ぎない。ペリーノは言葉の番人であり、耳を傾けてばかりいたのだから。そうして、誰かの口から言葉遣いの些細なミスが漏れると、話を遮って間違いを正すのであった。郵便局長が「asseguro（保障する）」と言おうものなら、この教師は福音を説くかの如く穏やかに話を遮る。「『asseguro（保障する）』ではありませんよ、ベルナルデスさん。ポルトガル語では『garanto（保証する）』と言うのですよ」[9]

間違いを改めたあとも話は続き、中断を繰り返す。どこでもこの調子なので、離れていった話好きの人たちは数知れない。それでも、ペリーノはどこ吹く風で自らの務めに確信を持って、言語純化運動の伝道師であり続けた。ところが、あの学者が現れたことにより、彼の使命が幾らか揺れ動いてしまった。今や全力を傾けているのは、

不意に出てきたあのライバルを叩き落とすことだった。

ペリーノが何を言おうと、どれほど熱弁を奮おうと失敗に終わった。というのも、ライムンド・フラメルは請求書の支払いを厳守するだけでなく、慈悲深い人、まさに貧困者の父であったから。さらに、薬屋がある専門誌で彼の名が第一線の化学者として言及されているのを目にしたからでもある。

二

化学者がトゥビアカンガに住み始めて数年後のある晴れた朝、バストスは店に入って来る彼の姿に喜んだ。この学者はそれまで誰の家も訪ねたことがなかったからである。ある日、教会の雑用係をするオレステスが彼の家に入り込み、来る無原罪懐胎の祝祭に向けた寄付を求めたことがあった。学者は迎え入れて応じはしたものの、苛立ちは明らかだった。

バストスはすぐにカウンターの奥から飛び出して、これ以上なくかしこまって迎え、叫ばんばかりに言った。

「いらっしゃいませ、先生」

学者は薬屋の恭しい態度はもとより、先生と呼ばれたことにも驚いた様子がなかった。薬品がずらりと並べられた棚にそっと目をやると、こう言った。

「バストス殿、折り入ってご相談が」

薬屋は腰を抜かすほど仰天した。自分が何の役に立てるというのだろう。その名は世界を駆け巡り、新聞各紙が格別の敬意をもって報じるほどの人物である。金（かね）のことか、そうかもしれない。家賃の滞納にしても、ないとは言い切れない。化学者を店の奥へと案内すると、そこにいた見習いは目を丸くして、一瞬、鉢の中の薬草のようなものを叩く乳鉢の手を止めた。

最後にたどり着いたのは、店の奥の突き当たり、こぢんまりとした部屋だった。そこは手間のかかる診療や簡単な手術をするところであった。バストス自身も手術に携わっていた。二人が腰を下ろすと間もなく、フラメルが口を開く。

「ご存じかと思われるが、わたしは化学に身を捧げる者で、学界では評価も高い」

「よく承知しております、先生。友人たちにもそのことを話しております」

「それはありがたい。そこでなんだが、わたしはある大発明を、ただならぬ大発明をしたのだ」

興奮して顔を赤らめ、一呼吸を置いてから続けた。

「それはもう見事な発明なのだが。差し当たっては、学界に知らせない方がよい。ご理解いただけるだろうか？」

「もちろんでございます」

「そこで、実験に立ち会い、しかるべく証明書を出していただける信用ある三人を集めてはくださらぬか。自分の発見の優先権を保護するために。ご承知のとおり、想定外のことも起こり得るがゆえ」

「なるほど、おっしゃるとおりです！」

「実は、金（きん）を作ることに成功したのだ」

「えっ？　なんと？」バストスは目を大きく見開く。
「そう！　金だ！」フラメルは毅然と答える。
「どうやって？」
「じきにお分かりになろう。いま問題なのは実験に立ち会うべき方たちのこと」化学者は淡々と言葉を続けた。
「たしかに。先生の権利は保護されなければいけませんし。なので…」
「そのうちの一人は」学者は話を遮ると、「あなただ。あとの二人については、バストス殿にご紹介いただきたい」
　薬屋はとっさに頭の中で知人らの顔を思い浮かべ、三分ばかり経ってから訊ねる。
「ベンテス大佐はどうでしょうか？　面識はおありで？」
「いや。ここで誰とも付き合いがないことはご存じでしょう」
「名士で資産家、しかも口が堅い人であることは保証できます」
「信仰心の篤い人だろうか？　こんなことを訊くのは死者の骨を扱わねばならないからだ。骨が不可欠なのだ」と言葉を継いだ。
「なんとまぁ！　彼は無神論者といって良いかと…」
「素晴らしい！　決まりだ。で、もう一人は？」
　バストスはまた頭を絞ったが、こんどは記憶を探るのに時間がかかる。そして、ようやく口を開く。
「カルヴァリャイス中尉はいかがでしょう？　収税役人ですが、面識はおありで？」
「すでに申し上げたかと思うが」
「そうでした。信頼できる、これまた立派な男なのですが」
「どうかしたのか？」
「フリーメイソンの会員で」
「願ったり叶ったりではないか」
「では、いつに？」
「日曜日だ。その日、お三方は実験に居合わせるべく拙宅へお越しくだされ。この発明の証明書へ必ず署名をしていただくよう願いたい」
「承知しました」
　日曜日になると、トゥビアカンガの名士三人は約束どおりフラメルの自宅へと出向いた。そして数日後、奇妙なことに男の姿は跡形もなく消えた。失踪の理由も分からなかった。

三

　トゥビアカンガは人口三千から四千人のすこぶる長閑な小さい町であったが、その駅にときおり急行列車が停車し出発することが町の誇りだった。かれこれ五年間、この町では窃盗の記録がない。扉や窓が使われるのは、リオがそうしているからというのが理由である。
　その薄い記録簿に記された最後の犯罪は、市議会選挙の際に起こった殺人事件であった。とはいえ、事件の加害者が与党の、被害者が野党の人間であったことから、この出来事は町の穏やかさを乱すこともなかった。その後も珈琲豆を生産し、町の名前の由来と

なった浅い小川が流れる中、屋根の低い小さい家の景色もそのままだった。

それだけに、記録に残る最もおぞましい犯罪の一件が村で明るみになったときの驚きはいかほどだったか！　それは死体損壊や父親殺しでなければ、一家殺害や収税所襲撃でもない。それ以上に酷いものである。あらゆる信仰と道徳的視点から冒涜に映ること。すなわち、トゥビアカンガの霊園たる平安墓地（ソセーゴ）で墓荒らしが起こったのだ。

当初、墓堀人は犬の仕業ではないかと疑ったが、壁を丹念に調べても小さな穴のほかは何も見つからなかった。穴を塞ぐがその甲斐もなく、翌日には墓碑が倒され、骨が盗まれた。次の日には、納骨所と一つの墓が荒らされた。人間か、あるいは化け物か。墓堀人は自分一人で調査を続けることに怖気づき、警察副署長へ相談を持ち掛けると、この事件が町中に知れ渡った。

町中の人々の身も心も怒りに包まれた。死者を敬うことより優先されるものは何もなく、良心の最後のよすがだ。冒涜に対して、町の長老派六人、聖書主義者と呼ばれる人たちが声を上げた。士官学校の元生徒でテイシェイラ・メンデス派の実証主義者[10]である測量技師ニコラウ、ノーヴァ・エスペランサ支部長[11]カマーニョ少佐、トルコ人[12]の小間物商人ミゲル・アブダラ、懐疑論者の元学生ベルミーロ。彼は居酒屋でパラチ産のカシャッサ[13]をちびちびと飲みながら、ふらふらと日々を過ごしている。そして、その鉄道会社の住み込み技師の娘。彼女はその辺鄙な地を蔑んでいたことから、当地の男たちから寄せられる想いには気づきもしなかった。急行列車が王子様を連れて来て求婚してくれることばかり夢見ていた。麗しくも高慢なコーラは、その犯罪が寂れた町の住民にもたらした怒りと恐怖に共感せずにはいられなかった。彼女が元奴隷や質素な農民の墓を気に掛けるのはなぜか？　そのような卑しい骨の行方が、彼女の上品な茶色の目を惹きつけることなどあり得ようか？　骨の盗難によって、その口元や目や胸の美しさを引き立たせ、リオの街を輝かせる夢を邪魔されるというのだろうか？

もちろんそうではない。しかし、冷徹で絶対的な死というものには、彼女自身も抗えないと感じていた。麗しい自分もいつかは骸骨となり、その墓地に運ばれて永遠に安らかに過ごす。コーラの望みは自分の骨が安全な墓場の立派な棺の中で、穏やかにゆったりと眠ることであった。肉が蛆虫を魅了し、悦ばせたあとに。

しかしながら、誰よりも頭に血が上っていたのはペリーノであった。この教師は寄稿した社説で、唸り声を荒げて糾弾した。「これまでの犯罪史には凄惨な出来事が山ほどある。マリーア・デ・マセード切断事件[14]やフォッコ兄弟の絞殺事件[15]など。だが、平安墓地（ソセーゴ）の墓荒らしのような件は一切記録にない」

町には動揺が広がっていた。誰もが落ち着かない表情をし、商売はすっかり止まってしまった。色恋もまた然り。上空には日に日に黒い雲が立ち込め、夜になると、ざわめきや呻き声、奇妙な物音が聞かれた。あたかも死者たちの復讐の声のようであった。

それでも墓荒らしは止まなかった。毎晩、二つ三つと墓が掘り起

こされ、その中身が忽然と消え失せた。住民たちは揃って、先祖の骨を見張ることにした。早々に駆け付けたものの、間もなく疲労と眠気のために一人二人と帰途につき、夜半過ぎには見張り役が一人もいなくなった。その日でさえも、墓が二つ掘り起こされ、骨がどこかへ持ち去られたことを墓堀人は確認したのである。

そこで警備隊が編成された。士気みなぎる十人の男たちは、警察副署長に対して死者が眠る地の夜間の監視を誓った。

初日、二日目、三日目と特に異変はなかった。ところが四日目の夜、見張り役たちがうとうとし出したころ、納骨所の区画の中をすり抜けて逃げ出そうとする人影に一人が目を留めた。男たちは急いで後を追い、吸血鬼たちのうち二人を捕まえることに成功した。それまで抑えていた怒りと憎悪のたがが外れ、気味の悪い盗人たちが地面に倒れて死ぬまで袋叩きにした。

この一報はすぐさま家から家へと駆け巡った。朝、公衆の面前で二人の身元が明るみになった。収税役人カルヴァリャイスとベンテス大佐。金持ち農園主で市議会議長である。ベンテスが死ぬ間際、繰り返しぶつけられる問いかけに対し、骨を集めて金（きん）を作ろうとしていたこと、さらに逃げた仲間は薬屋であることを白状していた。

驚きと同時に期待があった。どのようにして骨で金を作り出すのか？　そんなことができるのだろうか？　人々から敬われたあの裕福な男が骨泥棒などという下賤な行為に手を染めるだろうか。その話が真実でなければ！

あのようなくだらない死体でわずかな銭でも作り出せるのであれば、皆にとってどれほど良いことか！

配達人の長年の夢は息子を学士にすることであったが、これですぐさま実現できると目論んだ。昨年、家を購入した治安判事のカストリオット書記官は、手つかずのままの塀を建てて菜園と家畜を守ることができると考えた。小農園の主人マルケスは長らく牧草の確保に四苦八苦していたが、ほどなくコスタ家の緑溢れる牧草地が頭に浮かんだ。そこなら雄牛が丸々と太り、逞しくなるであろう。

金に化ける骨が村人たち全員の望みを満たし、彼らを喜ばせて幸せにする。こうして、二千から三千の住民は老若男女一人残らず薬屋に押し寄せた。

警察副署長は薬屋襲撃をかろうじて防ぎ、広場でバストスを待つよう説得することができた。薬屋は、いわばあのポトシ[16]の秘密をすべて一手に握っていたようなものだった。まもなく姿を現すと、椅子の上に立ち上がり強い朝日に輝く小さな金の延べ棒を手にして、見逃してくれと頼んだ。そして命を助けてくれれば秘密を教えるからと誓ったのだ。「今すぐ教えろ」との大合唱が起こった。彼は処方を書き出し、作業過程や試薬を示す必要があることを説明した。これは時間の掛かる作業であるため、翌日にならないと印刷して届けられない。不満が漏れ、食って掛かる者もいたが、警察副署長が責任を持って対処すると取りなした。

猛り立つ集団に対するその特有の穏やかさに、皆おとなしく自宅へと引き下がった。頭の中にあるのはただ一つ。今すぐ、できる限りの骨を手に入れることである。

この件は、鉄道会社の住み込み技師の家にも届いた。夕食の際、そのことで話は持ちきりだった。その学士は大学で学んだことを思い起こし、不可能だと断言した。錬金術など過去のものだ。金は金であり、単一の物質だ。骨は骨であり、化合物、リン酸カルシウム。あるものから全く別のものを生み出せると考えるのは、「愚にもつかない」ことである。娘のコーラは、この機に乗じて田舎者の蛮行を都会人ぶって嘲笑った。一方、母親のエミーリアはそれが可能であると信じて疑わなかった。

その夜、学士は妻が寝入っていることを確認して窓を跳び越え、一目散に墓地へと急いだ。コーラは裸足になって両手にサンダルを持ち小間使いを誘って骨漁りへ行こうとしたが、姿が見えなかったために一人で向かった。エミーリアは家に自分しかいないことに気づくと、皆が出かけたのだろうと察してやはり出かけた。町中で同様のことが起こった。父親は子どもに何も告げずに家を出る。母親は夫を出し抜こうとして家を出る。息子が、娘が、使用人が、町中の人たちが雲のかかった星明かりの下、平安（ソセーゴ）での地獄のランデブーへとひた走った。一人の例外もなく。町一番の金持ちと町一番の貧乏人がそこにいた。トルコ人のミゲル、教師のペリーノ、ジェロニモ医師、カマーニョ少佐、そしてコーラ。美しく魅惑的なコーラ。彼女はその美しい石膏のように白い指で墓から腐乱した遺体を掘り起こし、粘つく腐肉を引き剝がした骨を収まりきらなくなるまでスカートの裾に包み込んだ。持参金である。ピンク色の透き通るような小鼻は、どろどろに腐敗した組織の悪臭を感じることもなかった。

いざこざが起こるのも時間の問題だった。というのも、死体があまりに少なく、生ける者の飢えを癒すには程遠かったからである。刺し合い、撃ち合い、殴り合いが起こった。ペリーノは大腿骨を巡ってトルコ人を刺殺した。そして、家庭内においても揉めごとが出始める。しかし配達人と息子だけは争うことはなく、一緒に協力した。抜け目のない十一歳のこの子が父親にこう言葉をかけたのだ。「ねぇ、母さんのところへ行こうよ。よく太ってたでしょ」

朝になると、墓地には過去三十年に受け入れた以上の死体が転がっていた。ただ一人その場に居合わせず、誰も殺さず、墓荒らしにも加わらなかった人物がいた。酒呑みのベルミーロだった。

半開きの居酒屋に足を踏み入れると、そこには人影ひとつなかった。パラチ産のカシャッサを瓶いっぱいにして、トゥビアカンガの川岸に腰を下ろして飲むにまかせた。果てしなく広がる星空の下、花崗岩のでこぼこした川床の上を穏やかに流れる水を眺めながら。ベルミーロにしてもこの川にしても、一連のことには関心が湧かなかった。薬屋がポトシとその秘密を握ったまま行方をくらましたことも。

注

（1）翻訳の底本はSTEEN, Edla van (direção); BARBOSA, Francisco de Assis (seleção). A nova Califórnia. In: *Melhores contos de Lima Barreto*. 8ª ed., São Paulo: Global, 2002, pp. 39–49. を使用した。

（2）作家カイオ・プラード・ジュニオル（Caio Prado Júnior; 1907–1990）や文学批評家アグリピーノ・グリエコ（Agrippino Grieco; 1888–1973）らが、リマ・バレットをブラジル最高峰の作家と見なしている。（STEGAGNO-PICCHIO 2004: 440）

（3）ブラジル近代主義時代の始まりとなる文化イベントで、サンパウロ市立劇場で開催された。一九二二年二月十一日から十八日にかけて、文学、音楽、絵画、彫刻など様々な芸術分野で斬新な発表が行われた。

（4）本作以外のリマ・バレットの作品は、日本語では短編「ジャワ語を喋る男（O homem que sabia javanês）」（広川和子訳、一九七九年）と「ジャワ語がわかる男」（平田惠津子訳、二〇一〇年）の新旧二つの翻訳で読むことができる。

（5）Jacques-Henri Bernardin de Saint-Pierre (1737–1814) は、フランスの作家で植物学者。小説『ポールとヴィルジニー（Paul et Virginie）』（一七八八年）を執筆した。

（6）ペリーノ大尉（Capitão Pelino）、ベンテス大佐（Coronel Bentes）、カルヴァリャイス中尉（Tenente Carvalhais）などの肩書は、二十世紀初頭におけるブラジル地方政治の有力者に与えられた称号。作者リマ・バレットはこうした登場人物を皮肉的に描くことで、地方有力者（コロネル）による寡頭支配体制（コロネリズモ）を批判した。

（7）原文は次のとおり。Não há dúvida! O homem tem talento, mas escreve: «um outro», «de resto»... 規範文法に拘泥するペリーノ大尉のような人物からすれば、いずれもフランス語的表現（galicismo）として使用すべきではないとされる。現代ポルトガル語の観点からは、代名詞を重ねる前者が誤用とされるのに対し、後者は一般の辞書にも掲載されており、必ずしも誤った用法とは言い切れない。

（8）Francisco Sotero dos Reis (1800–1871) は、ブラジルの作家で文法学者。Antônio Cândido de Figueiredo (1846–1925) は、ポルトガルの作家で文献学者。Antônio de Castro Lopes (1827–1901) は、ブラジルの作家でラテン文学者、政治家。

（9）原文は次のとおり。«Eu asseguro, dizia o agente do Correio, que...» Por aí, o mestre-escola intervinha com mansuetude evangélica: «Não diga asseguro Senhor Bernardes, em português é garanto.» asseguro（不定詞：assegurar）も garanto（不定詞：garantir）も「請け合う」の意味を持つ類語。ここではペリーノ大尉の趣味に合わない言い方をした郵便局長の揚げ足を取っていると解すことができる。

（10）ブラジル国旗の中央に書かれている「秩序と進歩（O rdem e Progresso Progresso）」は実証主義の標語。二十世紀初頭のブラジルでは実証主義の影響力が強かった。

（11）「新たな希望」を意味するフリーメイソンの支部（ロッジ）長。

（12）中近東出身者、アラブ系の人々を指す総称。

（13）サトウキビを原料とするブラジルの蒸留酒。

（14）一八九二年に起こった事件。マリーア・デ・マセードの遺体はリオデジャネイロ市内のデポージト広場にある籠の中に捨てられていた。（LIMA BARRETO 2017: 93）

（15）カリオカ通り（リオデジャネイロ市内）の宝石屋で働いていた二人は、密売人集団によって絞殺された。同事件は当時大きな反響を呼び、映画の題材にもなった。（LIMA BARRETO 2017: 93）

（16）莫大な銀を算出し、十六世紀スペインの黄金期を支えた植民地支配下の銀山。現在のボリビア南部に位置する。ここでは「あふれ出る富の源」としてその名が用いられている。

参考文献

BARBOSA, Francisco de Assis. *A vida de Lima Barreto*: 1881–1922. 11ª ed., Belo Horizonte: Autêntica Editora, 2017.

BASTOS, Winter. A nova Califórnia de Lima Barreto e as velhas ambições humanas. 2017. Acesso: https://homoliteratus.com/a-nova-california/california/（2021. 3. 1515）

BOSI, Alfredo. *História concisa da literatura brasileira*. 37ª ed., São Paulo: Cultrix, 2000.

BOTTMANN, Denise. Lima Barreto em tradução. In: *Revista da Anpoll*. v. 1, nº 44, p. 313–330, Florianópolis, Jan./Abr. 2018.（2021. 5. 16）Acesso: https://revistadaanpoll.emnuvens.com.br/revista/article/view/1145

JOSÉ ARBOLEYA, Valdinei; FORTES, Rita Felix. Desordem pública e moral: sociedade, patrimonialismo e ambição no conto *A nova Califórnia*. In: Revista Trama. v. 12, n. 25, 2016, pp. 267–282. Acesso: http://e-revista.unioeste.br/index.php/trama/article/view/7828（2021. 3. 15）

LIMA BARRETO, Afonso Henriques de. A nova Califórnia. In: *Melhores contos de Lima Barreto*. Edla van Steen (direção); Francisco de Assis Barbosa (seleção). 8ª ed., São Paulo: Global, 2002, pp. 39–49.

LIMA BARRETO. (trad. COSTA, Francisco Araújo da.) *O homem que sabia javanês e outros contos selecionados – edição bilíngue português-inglês*. São Paulo: Landmark, 2019, pp. 35–65.

LIMA BARRETO. (org. CORRÊA, Felipe Botelho) *Crônicas da Bruzundanga*. e-galáxia: s/l, 2017.

NEGREIROS, Carmem. *Lima Barreto em quatro tempos*. Belo Horizonte: Relicário, 2019.

SCHWARCZ, Lília Moritz. Introdução – Lima Barreto: termômetro nervoso de uma frágil República. In: LIMA BARRETO. *Contos completos; organização e introdução Lília Moritz Schwarcz*. São Paulo: Companhia das Letras, 2010, pp. 15–53.

SILVA, Tiago Nascimento; AGRA, Maria Lúcia de Souza. A desconstrução da sociedade em A nova Califórnia. In: *Miguilim* – Revista Eletrônica do Netlli, Crato, v. 1, n. 1, 2012, pp. 44–55. Acesso: http://periodicos.urca.br/ojs/index.php/MigREN/article/view/354（2021. 3. 15）

STEGAGNO-PICCHIO, Luciana. *História da literatura brasileira*. 2ª ed., Rio de Janeiro: Nova Aguilar, 2004.

VIANA, Nildo. A força do dinheiro em A nova Califórnia, de Lima Barreto. 2018. Acesso: https://informecritica.blogspot.com/2018/01/a-forca-do-dinheiro-em-nova-california.html（2021. 3. 15）

“A nova Califórnia”, de Lima Barreto

Masayuki KIBE

〈Sumário〉

Esta é a tradução inédita para japonês do conto “A nova Califórnia”, de Lima Barreto (1881–1922). Trata-se de um dos escritores mais consagrados da literatura brasileira e as suas obras – romances, contos, crônicas – são ainda hoje apreciadas pelos leitores.

Publicado em 1911, “A nova Califórnia” foi incluído como apêndice do grande romance *Triste fim de Policarpo Quaresma* (1915). O título do conto remete para a *Febre do Ouro* que ocorreu na Califórnia em meados do século XIX. Lima Barreto descreveu satiricamente a ganância dos seres humanos, transportando o palco para os subúrbios do Rio de Janeiro, sua terra natal.